

パラグラフ・ライティング指導の実践

Practice report of paragraph writing guidance

国語科 山根正博

<要旨>

本授業実践では、欧米の学校で行われ、国際標準となっていると言われていたパラグラフ・ライティングによる文章構成法の定着を目指した。パラグラフ・ライティングへの橋渡しとなる課題を用意し、少しでも違和感なくパラグラフ・ライティングを定着させることを目指した。パラグラフ・ライティングで書く課題を課し、その定着を図った。生徒の課題例を見る限りではある程度の達成は果たしていると思われるが、生徒の感想を見てみると、残された課題も少なくない。また、課題の中で移民受け入れの日本語への影響と、日本語の今後のあるべき姿についても考えさせた。

<キーワード> パラグラフ・ライティング 日本語が減じる 国際標準

1. はじめに

1-1 学校設定科目「現代文Ⅰ」

本校には「現代文Ⅰ」という、平成27年度から始まった学校設定科目がある。導入の経緯やカリキュラム上の意義などについての詳細は、日渡正行氏の「『書くこと』と『探究活動』を柱とした『国語』のあり方—学校設定科目「現代文Ⅰ」の実践と今後の課題—」（『東京学芸大学附属高等学校 研究紀要』第53集 平成28年3月）に詳しい。科目の特徴をいかにつまんで説明するならば、「探究活動」を支えるという面があり、「情感や感性に関わる文章や言語活動よりも、論理的な思考や文章構成能力の育成に目を向けて」いる科目だと言っていいだろう。高校一年用に開設してある科目であり、「探究活動」の展開と連携を取りつつ進めていく科目なのだが、年度末に「探究活動」のまとめを行うことを意識して、年度の後半においてパラグラフ・ライティングの指導を行っている。本稿では、平成29年度に行った、パラグラフ・ライティングの特徴とその方法を生徒に伝える実践を紹介したい。

1-2 パラグラフ・ライティングとは

パラグラフ・ライティング、そのまま日本語に直せば「段落による作文」とでもなるのだろうか。段落を意識して文章を書かせるということであれば恐らくどこの教室でも行われているだろう。パラグラフ・ライティングとは、アメリカをはじめとする欧米諸国では当たり前のよう指導されている、論理的に物事を伝えるために役立つ文章の書き方のことである。今回の実践では、前掲日渡論文でも紹介されている倉島保美『論理が伝わる

世界標準の『書く技術』（2012年11月 講談社）を参考にしている。日本で一般的に行われている（であろうと思われる）文章構成法とパラグラフ・ライティングの違いとしては、以下のような点を上げることができる。

- ・文章は、総論（現状または背景・問題点または必要性・目的・結論・重要な情報などからなる段落）と各論で構成される。総論は各論のトピックセンテンスで構成する。
- ・一つのパラグラフでは一つのトピックだけを扱う。
- ・一つのパラグラフは一つのトピックセンテンスを含む。
- ・トピックセンテンスはパラグラフの冒頭に置き、冒頭のトピックセンテンスだけを飛ばし読みしても全体の流れがわかるようにする。

パラグラフを段落、トピックを話題と言い換えてしまえば、「一つの段落で一つの話題だけを扱う」ということになり、それほどの違和感はない。しかし、総論そのものおよびトピックセンテンスの位置、総論とトピックセンテンス（要約文とでも言えばよいか）との関係となると、これまでの書き方に大幅に手を入れる必要が出てくる。これまでと違うことをやるとなると、なぜこれまで耳にすることのなかった書き方を身に付けなければならないのか、今までの書き方をより練り上げるのでは駄目なのかといった疑問が生じるのはやむを得ないところであろう。倉島保美氏は、会社勤めをしていた頃に国際学会に出す論文のチェックを頼まれ、自社の論文と他社の論文を比較したことがあり、その時のことを前掲書中の「国際学会でその差は一目瞭然」と題したコラムで以下のように記している。

チェックを頼まれた論文は、分かりにくく書かれてい

ました。それは当然です。書き手は論理的に書くことを勉強していないので、その論文にはパラグラフという概念がありません。(中略) その論文のロジックを理解するには、相当読み込まなければなりません。(中略) その参考論文の中に、分かりやすく書かれている論文がありました。パラグラフを使って論理的に書かれていたのです。著者を見ると IBM の研究員でした。(中略) 研究内容以前に、勝負あった感じがしました。

ありていに言ってしまうと、国際標準(欧米標準と言ったほうが正しいのだろう)だからということではない。日本の学校教育の中でも、伝統的なものでは起承転結や序破急といった構成法が教えられてこなかったわけではない。起承転結や序破急と、パラグラフ・ライティングのどちらが優れた文章構成法なのかはなかなか難しい問題である。何を目的とした文章かということによっても変わってくるだろう。ここ十数年を振り返ってみて、「国際標準」という旗印の前に、いろいろなことを押し付けられてきたことに憤懣やるかたない思いを抱き続けている人も少なくないだろう。それでもパラグラフ・ライティングに触れなければならない理由をあげるとすれば、生徒たちが大人になった時に、報告書や論文と言った論理的な文章において、国際標準を知らなかったために不利な思いをしないようにするためという点に尽きるのかもしれない。

2. 授業実践

2-1 パラグラフ・ライティングへの橋渡し

前述したが、パラグラフ・ライティングでの総論とトピックセンテンスの扱いはやはり難しい。ある程度指導を進めていった段階でも、生徒たちが違和感を覚える部分である。今回は名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校国語科 著、執筆協力 戸田山 和久『はじめよう、ロジカル・ライティング』(ひつじ書房 2014年6月 以下『はじめよう』と略す)を橋渡し役として使ってみた。本書では文章を書くにあたって、話題・理由・主張の三項目と、それぞれに対する説明を中心に組み立てることを提唱している。もう少し詳しく説明すれば、話題においてこの文章で扱われている問題を提示し(必要に応じて説明を加える)、提示された問題に対する主張を述べ、なぜそのように考えるのかという理由(理由は一つに限らない。また必要に応じて説明を加える)を説明するといった流れである。制約が多そうに見えるが、一般的な文章指導の流れから大きく外れたものではなく、この程

度の制約であれば生徒も戸惑うことなく取り組むことができる。この形式に当てはめて書くために、以下のような課題を提示した。

次の問題について、意見文を作成せよ。A 話題・B 理由(2つ)・C 話題についての説明・D 理由を支える説明(理由それぞれについてつけること)の四つの要素を必ず文章内に盛り込むこと。

問題 選挙権は20歳以上に戻した方がよい。

書き終えたものを見ながら、自分の書いた文章のどの部分が「話題・話題についての説明・理由1と2・それぞれの理由についての説明」となっているのか意識させた上で、パラグラフ・ライティングについての説明を行い、手元にある文章をパラグラフ・ライティングの書き方に準じたものに直す作業へと進んでいく。

2-2 パラグラフ・ライティングへの転換

パラグラフ・ライティングについて、総論とトピックセンテンスの関係について一通り説明はするが、いきなり書くことはなかなか難しい。『はじめよう』での書き方の指示に基づいて仕上げた文章をパラグラフ・ライティングになおしていく作業を通してパラグラフ・ライティングの書き方を理解させていきたい。作業の手始めとして、『はじめよう』でのそれぞれの項目がパラグラフ・ライティングの以下の項目に対応することを説明する。

『はじめよう』	パラグラフ・ライティング
話題	現状・問題点など
話題についての説明	現状・問題点など
主張	結論
理由	重要な情報
理由についての説明	重要な情報

その上で、以下のような課題提示を行い、各論のパラグラフを先に完成させ、その後で総論をまとめさせた。

「選挙権は20歳以上に戻すべきかどうか」について、以下の要領でまとめていくこととする。これまでの手順をよく思い出して書くこと。

◎現状のパラグラフを記せ。

- ・一つのパラグラフは4～8の文で構成すること。(以後のパラグラフではこの注意を省略)
- ・冒頭にパラグラフの要約文を持ってくること。(以後のパラグラフではこの注意を省略)

- ◎問題点と結論のパラグラフを記せ。
- ◎重要な情報1のパラグラフを記せ。(2以降は省略)
- ◎総論のパラグラフ(現状・問題点・結論・重要な情報1～3をそれぞれ一文で)を記せ。

書き上げた段階でグループになって文章を交換し、各論のパラグラフの冒頭がそのパラグラフの要約文になっているか、各論のパラグラフの冒頭と対応した内容が総論にあるか、重要な情報は有効な情報であるかといった点を相互に確認させた。その上で学期のまとめとなる課題に取り組みさせた。次の節で課題と、比較的よく書けている解答例を示しておく。

2-3 生徒に提示した課題と生徒による解答例

2-3-1 2学期末の課題

以下の文にある「大学入試における地域優先枠」について、自分の見解を以下の要領でまとめよ。

- ・総論のパラグラフは、「現状・問題点・結論・重要な情報1～2」をそれぞれ一文で。
- ・総論以後のパラグラフは4～8の文で構成し、冒頭をパラグラフの要約文にすること。
- ・問題点と結論は一つのパラグラフにしてもよい。

「以下の文」

東京大など東京都内の有名5大学で、今春の入試合格者の75～55%を首都圏の高校出身者が占め、30年間で約1・4倍に増えていることがわかった。下宿生の経済負担増などが背景にあるとみられる。学生の画一化などを懸念する大学側は、地方出身者の確保策に乗り出した。地方出身者の東京離れを食い止めようと、大学側は奨学金新設などの対策を始めている。(ここまでは事実)

(ここから先はフィクション)

有名5大学の一つのA大学でいうと、合格者のうち首都圏(東京都、埼玉、千葉、神奈川県)の高校出身者の比率は、86年は51・8%だったが、今春は73・9%に上昇していた。この現状について、A大学の入試担当の部署に質問してみたところ、以下のようなコメントを得た。「A大学は、創立以来、全国各地から色々な個性を持った生徒が集まって、多様な個性がぶつかりあう中で、人間力が磨かれる大学であることを最大の特色としてきました。教室で学んだこと以外で優れた能力を発揮することによって高い評価を受ける卒業生を数多く輩出してきた

こと、これがA大学の良き伝統だと言えます。A大学で学んだ卒業生が、郷里に帰るだけでなく、全国に散らばって、使命感をもって全国の教育界や財界、政界などで活躍してきたのも、A大学の伝統です。現在は、地方から入学する生徒が減っています。原因は色々あると思いますが、主要因としましては、首都圏に比べて地方は過疎化が早く進行しており、高校の生徒数が首都圏に比べて圧倒的に少ないことがあると思います。また、入学者選抜が知識優先・試験技術優先になっていることもあるかもしれません。それ以上に、親御さんの経済的な負担も挙げられます。大学として、過疎化についてはなかなか対処できませんが、親御さんの経済的な負担については、なるべくその負担を軽減していきたいと考えています。A大学では首都圏以外の受験生を対象に「めざせ!都の王者奨学金」という入学前予約型奨学金を2009年度入試から他大学に先駆けていち早く導入しています。また、入学試験において、地域の優先枠を設けることも現在検討しています。具体的には、定員の3～4割を各都道府県に均等に割り振り、都道府県の枠内で選抜をするといった形です。仮に100人の枠を各都道府県に割り振ると、各都道府県約2名の優先枠ができます。各都道府県の成績上位者2名を優先的に合格者にしようという選抜方法です。一般的に都市圏の受験生の方がペーパーテストに強い傾向があるので、東京都で3番目の成績の受験生と過疎化の進む県で2番目の成績の受験生を比べた時に、東京都で3番目の受験生の方が点数が高いということもあるかもしれませんが、それでも過疎化の進む県で2番目の受験生を優先的に合格者とする事で、学生の多様性を確保する方法もあると考えています。それによって、A大学で学ぶ学生たちが多様な地域の文化に触れ、さまざまなバックボーンを持った個性豊かな仲間と切磋琢磨し、自らの価値観に揺さぶりをかけられ、大いなる刺激を受けてもらいたいと考えています。」

もしこのA大学のこの取り組みが実施されることになれば、画期的な取り組みとなるであろう。今後の動向を注視していきたい。

生徒の解答例①

現在、東京都内の有名5大学の合格者数の5割～7割を首都圏の高校出身者が占め、地方出身者が減少している。大学側は学生の画一化を懸念し、定員の3割～4割を地方出身者に割り当てようとしているが、その提案に反対する声もある。私も同じように反対する。その理由は2つあり、1つ目は地方出身者だけ別枠が与えられる

のは不公平だということ。2つ目は大学のイメージが落ちることにつながりかねないということだ。

東京の有名5大学の合格者数に占める地方出身者の割合は減少傾向になっている。地方出身者の「東京離れ」が目立ち始めた。大学側は多様な学生を取り入れ、それぞれの個性がぶつかりあう中で人間性が磨かれることを期待している。そこで大学は定員のうち3割～4割を地方出身者に割り当てるとする提案をした。

しかし、提案には反対の声も多い。クラスで提案に賛成か反対か聞いたところ、ほとんどの人が反対であった。この結果は、首都圏の高校生はこの提案に反対する人の方が多いうことを示しているように思う。私は大学入試はどの高校生も同じ基準で合否の判定を受けるべきだと思うので、この提案に反対する。

理由のうち、1つ目は地方出身者だけ別枠が与えられるのは不公平だということだ。まず、各都道府県では人口が異なるので、当然首都圏は人口が多く、倍率も高い。それなのに地方出身者にだけ別枠を与えたら首都圏出身の高校生は不利になる。大学入試は同じ基準で合否が決まらなければ不公平が生じる。公平性を欠いてまでも、個性豊かな人材を取り入れることが重要なのだろうか。

2つ目は、大学のイメージが落ちることにつながりかねないことである。地方出身者に別枠を与えているため、本来ならば合格水準に達していない人が入学することもありうる。このような場合が起これば、大学の偏差値は下がり、合格水準に達していない生徒は授業を理解するのが大変な状態になるだろう。将来的に考えると、卒業論文や研究の質の低下も懸念され、大学のイメージダウンにつながるのではないだろうか。

生徒の解答例②

東京大学など都内の有名5大学で、近年入試合格者の多くの割合を首都圏の高校生が占めるようになってきたため、大学側は地方出身者の確保のための奨学金新設などに乗り出した。だが、この取組で首都圏の高校生が不利になることも考えられる。こうした大学入試における地域優先枠は推し進めていくべきである。大学入試における点数は入学後を考えるとさほど重要な要素ではない。また、学生という様々なことを吸収しやすい時期に多様な人々と出会うことは将来大きな財産になる。

近年、都内の5大学で、入試合格者の多くの首都圏の高校生が占めてきた。大学側は地方出身者の確保のための奨学金新設といった対策を始めた。下宿生の経済負担増などが背景にあるようだ。今春は合格者の75～55%

を首都圏の高校出身者が占め、ここ30年で約1.4倍に増えている。学生の画一化を懸念する大学側は地方出身者の確保のための対策を始めた。

しかし、こうした取り組みで、首都圏の高校生が不利になることも懸念される。だが、地域優先枠のシステムは推し進めていくべきだ。各都道府県の成績上位者2名を優先的に合格者にするという方法では、東京では3番目の成績の人が地方で2番目の成績の人より得点が高いということが起こりうる。それでも多様性の確保のためこのシステムを進めるべきであると考えます。

実際のところ、入試における点数は入学後のことを考慮した際、そこまで重要な要素とはなりえないだろう。その大学に受かるため概ね皆同程度の努力はしている。またたとえ主席で入学しても、そこから勉強をやめてしまつては意味がない。ようするに、その人のやる気の問題であり、入試の点数における多少の差異は問題視するべきではない。

また、学生という様々なものを吸収しやすい時期に多様な人々と出会うのは将来的に非常に価値あるものとなる。社会に出てどのような仕事に就くにしろコミュニケーション能力というのは必須のスキルとなってくる。そして、そのコミュニケーション能力を鍛えるには様々な人と出会い、交流し、多様な考え方を吸収していくことが必要である。そのため、地域出身者を大学に増やすことで多様性を確保し、多様な人々との交流の場を設けるのは日本の社会においても重要なことであるのだ。

2-3-2 3学期の展開と課題

まず①から⑥の文章を読ませた。記事の概略については、後に記しておく。

- ①鳥飼玖美子「訳読 vs. 会話」論争をやめ日本人に合う教育を（インタビュー）朝日新聞 2010年10月20日
- ②井上ひさし「国語事件殺人辞典」初演1982年
- ③外国人のため簡約日本語“発明”へ国立国語研、3年がかりで 朝日新聞 1988年2月26日
- ④ニッポン人脈記 日本語の海へ5 東京弁切り捨て御免か 朝日新聞 2012年5月28日夕刊
- ⑤ニッポン人脈記 日本語の海へ7 南の島は「I go ちょっと」 朝日新聞 2012年5月30日夕刊
- ⑥ニッポン人脈記 日本語の海へ12 「やさしい」は誰のため 朝日新聞 2012年6月7日夕刊

①は英語を話す人の中で、圧倒的多数を占めるのは英語を母語としない人たちであるということを意識し、母語話者の英語にとらわれない英語学習を提言したインタ

ビュー記事である。文法にうるさくない英語が広まるのは生徒たちにとっても好ましいことであるようなのだが、同様のことが日本語を対象にして生じたらどうなるかということ扱ったのが、②の脚本と③の記事である。④は標準語によって東京弁が消滅していきそうな現状を、⑤は日本語圏の周縁で他の言語と混ざり合っただレオール語化している様子を、⑥は東日本大震災の時に、日本語を母語としない人たちに情報を伝えるため、簡単な日本語が活躍した様子を伝えた記事である。念の為断っておくが、①～⑥は前任校の東京学芸大学附属国際中等教育学校の公開研究会で使用した教材だが、この教材の実践を活字化するのは今回が初めてである。余談だが、④から⑥の記事を含む、「日本語の海へ」シリーズは国語に関わる教員にとっては非常に興味深い内容が多く、一刻も早い書籍化が望まれる。

これらの記事を読み、移民受け入れのメリット・デメリットについてクラス全体で論点を出し合っ、確認した上で、課題を提示した。なお、課題に続いて生徒の解答例を示してはあがあるが、「日本語が変質していく可能性が高いので、移民はこれ以上受け入れるべきではない」という立論は比較的容易なので、その立場の文章は今回は割愛した。

言語や文化という観点から考えて、日本は現在以上に移民を受け入れるべきかどうか？という問題について、以下の点を踏まえてまとめよ。

- ・ 総論のパラグラフは、「現状・問題点・結論・重要な情報1～2」をそれぞれ一文で。
- ・ 総論以後のパラグラフは4～8の文で構成し、冒頭をパラグラフの要約文にすること。なお、今回に限り、問題点のパラグラフは8文を超えてよい。
- ・ 問題点のパラグラフについては、移民受け入れ賛成・反対のそれぞれの立場のメリット、デメリット（ともに一般論も交えてよい）に触れること。
- ・ 結論のパラグラフについては今回は一文でもよい。前にある問題点のパラグラフにつけてもよい。

生徒の解答例

現在労働力の減少により人手不足の状態が続いている日本では、今以上に移民を受け入れるべきか否か問われている。その背景として移民を受け入れることによる言語・文化的なメリット、デメリットがある。ただ、その国の文化や言語は人々により絶えず変えられるものであ

り、後に述べる独自性を保とうとするのが間違いである。またこれからのグローバル社会で生きていくという意味でも移民受け入れによる国際理解は有益なものとなる。よって移民を現在以上に受け入れるべきである。

現在労働力の減少により人手不足の状態が続いている日本では、今以上に移民を受け入れるべきか否か問われている。近年騒がれている日本の少子超高齢化社会は加速し、人口減少も含め深刻な社会問題となっている。人口の減少に伴い、生産年齢人口も減り、労働力が足りなくなっている。その人手不足を移民によって補おうとしているのである。

しかし、移民を受け入れることによるメリット、デメリットがある。移民を受け入れるとなると、言語的な面において、移民向けのやさしい日本語を作ることによる、国籍に左右されない容易なコミュニケーションが可能になる。また、文化的な面では、移民受け入れに伴う様々な文化の流入により、日本人がそれらに触れ国際理解につながる。さらに移民が持ち込む海外の技術と日本の技術を組み合わせることで新たな製品の生産が可能になりうる。ただ、前述のようにデメリットもある。言語的な面では、やさしい日本語をつくること、外国人が使う日本語が普及してしまうことにより元からある日本語の独自性が失われてしまう恐れがある。文化的には、海外の文化と日本の文化が入り乱れることで、今まで世界に誇っていた日本独自の文化が侵され衰退してしまうかもしれない。そして、技術的な面においては、日本独自の技術が、移民がそれを覚えることで海外に流出してしまう恐れがある。

言語、文化、技術的な面のデメリットとして共通に「独自性」というものがあつたが、そもそも国の文化や言語は人々により絶えず変えられていくものであり、その独自性を保とうとすることが本来間違いなのである。世の中に絶対不変などというものはなく、それは文化や言語、技術にも当てはまる。現在我々が使っている日本語も時代とともに変化してきている。だが、それを脅威だと感じる人がいるだろうか。今回の「移民受け入れ」による日本の言語、文化、技術的な独自性の弱体化も、変化の原因が外国人に置き換えられているだけで、これまでと何ら変わりはなく、そういう状況で「独自性を保とう」とするのもおかしい話である。独自性の定義もよくわからない。よってこうした文化、言語、技術の変化を危惧する必要はない。

また、これからの時代、グローバル社会で生きていくという意味でも移民受け入れによる国際理解は非常に有

益なものである。様々な情報が大量に瞬時にやり取りされる今日では、これまで人類が固持し、取り合いをしてきた国境というものが薄れつつある。そのような、これまでの人類の営みによって生まれた国家間の違いをこれから我々は認め、埋め合わせしなければならない。そういうわけで移民を受け入れ、多様な文化に触れることはこれからの時代を生きていく人にとって有益なものとなる。

以上より、移民を今以上受け入れるべきである。

2-4 パラグラフ・ライティングで書いてみた感想

「パラグラフで書いてみて、違和感があったか？どんな点に戸惑ったか？」という点について、生徒に感想を書かせてみた。そのうちのいくつかを次に示しておく。

- ・初めは戸惑った。何かを主張する文を書く時、今までは文を書いていくときにそれをまとめて最後に結論を書いていた。しかし今回ははじめにこれから何について書くか提示しなくてはいけなかった。最後まで考えてから文章にするというのに慣れておらず、大変だった。
- ・普段文を書いている流れとかなり違ったのでとても書きにくかった。要約文で言いたいことがほとんど言えてしまって、同じようなことを繰り返し述べるようになってしまった。
- ・論理の流れに違和感があった。いつもの文章や会話なら、「～だから…」と根拠の後に結論が来るが、パラグラフ・ライティングだと「…なぜなら～」と結論が先にくる。考えるときの論理と逆順に書くので、結論と根拠になる重要な情報のつながりを伝え忘れやすく、情報が結論から独立してしまいがちだと感じた。
- ・パラグラフを用いて文章を書くことで、論理の展開が非常にわかりやすくなると感じた。また書いているうちに自分の言いたいことも整理でき、書いているうちに何を言いたいかわからなくなるということも少なくなるので、効率的な書き方ができる。総論や要約文をできるだけ簡潔かつ話の内容をすべてまとめた文にするのが難しく、少し油断をするとすぐに複雑でわかりにくい文章になってしまうのが難しかった。
- ・違和感はなかった。新しい文章の書き方としてとても有効であるように感じた。総論のパラグラフにおいて、一文ずつ書いていた文章を各パラグラフに置いて内容を広げていくのは困難な作業であった。それゆえに総論のパラグラフにおいてはあえて細かく文章を書かないのが最善だと感じた。

・率直な意見として、自分の頭の中にある意見を整理しやすいなと思いました。違和感というよりも「ああ、やりやすいな」という納得する思いのほうが強かった。総論のパラグラフを作ることにより、文の全体の構成がしっかりとまとまりのあるものになったと思う。

3. まとめと今後の課題

生徒の解答例を多くは示せていないことから想像されるように、すべての生徒がこの書き方をマスターできたわけではない。課題を書き上げたあとも、違和感を持ち続けた生徒も少なくはなかっただろう。生徒の感想を見てみると、「頭の中を整理しやすい」という意見もあり、一定の効果のある書き方であることは確かなのだろう。その一方で、「要約文で言いたいことがほとんど言えてしまって、同じようなことを繰り返し述べるようになってしまった」という感想があったように、総論と各論での話題の振り分け、総論と各論で二度同じ話題に触れる違和感など、指導方法を改善することによって乗り越えていかなければならない課題も残されている。またパラグラフ・ライティングについての授業者の理解もより深めていく必要がある。

それにしても、パラグラフ・ライティング対する違和感是指導者の私自身にも残り続けていたように思う。パラグラフ・ライティングについて指導しながら、パラグラフ・ライティングの教育が広まることによって、そうではない書き方が駆逐されてしまうような事態が起きるのだろうかという思いが頭の片隅に残り続けていた。標準語によって、東京弁が駆逐されたように、パラグラフ・ライティングによって、起承転結による論理的な文章が、波打ち際の砂の表情のように消滅してしまう日が近い将来やって来たりするのだろうか。